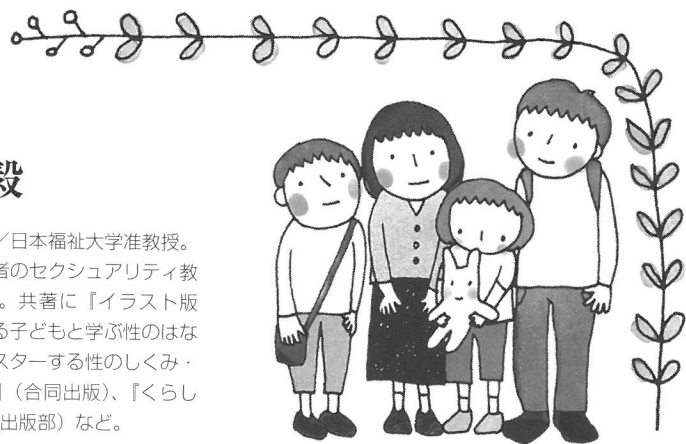


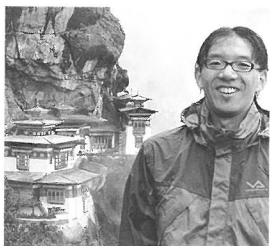
# セロが学ぶ若者のセクシュアリティ 障害のある子ども



日本福祉大学

## 伊藤修毅

いとう なおき / 日本福祉大学准教授。  
専門は障害児・者のセクシュアリティ教育、  
青年期教育。共著に『イラスト版発達に遅れのある子どもと学ぶ性のはなし-子どもとマスターする性のしくみ-いのちの大切さ』(合同出版)、『くらしの手帳』(全障研出版部)など。



## 最終回 さあ、実践を!

早いもので、この連載も最終回になりました。最後に、読者のみなさん(特に集団での実践を行える学校等の現場のみなさん)が、性教育実践に踏み出すための一歩を後押しできればと思います。

### ☞ 社交ダンスの実践より

本連載の第6回「距離感ではなくふれあい」のなかで、「ふれあいの文化的教育的保障」が大切であることを強調しました。心地よいふれあいを経験できる文化はさまざまなものがありますが、その一つに「社交ダンス」が挙げられます。異性とペアになって緊密な距離感で踊る社交ダンスは、「異性とは腕一本離れる」の呪縛を背負わされている若者たちには、けっして容易なものではありません。

椿さんと子さんは、季刊セクシュアリティNo. 60に掲載した社交ダンス「Shall We Dance?」の実践報告のなかで、以下のように述べています。

子どもたちの日頃の言動から、異性を異性として強く意識し関心をもっていることが伺えます。社交ダンスは、

こうした「異性とかかわりを持ちたい」という青年らしい要求に応えるものであり、相手のことを思いやりながら楽しくかかわることのできる文化です。異性とかかわりに関する指導という点、ともすれば、「女の人に触ってはいけません」とか、「プライベートゾーンに触らせてはいけません」等、禁止に終始してしまいがちです。しかし、社交ダンスは、こうした異性との距離感について、直接かかわりながら自然に学ぶことのできる貴重な教材です。また、その取組を文化祭のステージ発表につなげることで、学年集団としてのまとまりをさらに強くするねらいもありました。

この実践は、学校祭のステージ発表の練習に留まらず、身体接触のロールプレイ、ペアを決めるための告白体験、そして、「ふれあいの文化」の保障など、青年期教育に欠かすことのできない要素がふんだんに盛り込まれています。椿さんは、この実践を通して、「安心できる形でのスキップが保障された」ことで、「破壊的な行動障害」のある子ども含む不安定な子どもたちの「情緒が安定した」と振り返っています。

学校の先生方からよく聞かれる悩みに「性教育をしたいけど、そのための時間を確保できない」ということがあります。「性教育」という看板を掲げて時間確保することはむずかしくても、この実践のように、元々教育課程に位置づいている何らかの時間に、性教育の要素を盛り込んでいくということであれば、実現できる学校もあるのではないのでしょうか。

### ☞ 高等部1年目からの積み上げ

椿さんの「Shall We Dance?」の実践は高等部2年生に行われたものですが、椿さんは、この学年の1年生の時の様子も綴られています。学ぶところが多いので、少し長く引用します。

障害の重い子ども、高校生ともなれば異性に強い関心を持ち、それは時として性的な行動として現れます。ましてや、障害の軽い子どもたちもなれば、話題の中心は異性のこと、性に関する悩みも課題も多岐にわたります。教師間でよく話題になるのも、男女の距離感や身体接触、自慰、恋の話、携帯電話をめぐめる問題などでした。こうした

実態から、私は、高等部教育では早期から性教育に取り組むことで、性に関して正しい知識を持ち、悩んだり困ったりしたときに相談できる人間関係をつくっておく必要性があると考えていました。性の問題を発達の姿と大らかに受け止めてくれる大人がいることを子どもたちにとってほしいという思いもありました。

そこで1学年から、3年間を見通した取組として学年全員一緒に性教育の授業を行うことにしました。(中略)性教育の授業では、驚いた顔、真剣な顔、はにかんだ笑顔等、子どもたちは様々な表情を見せてくれました。しかし私は、子どもたちより、授業づくりを通して教師自身の子どもに向き合う姿勢の変化の方が大きかったと思っています。性について子どもたちがどこまでわかっているのかわかっている。ことや、授業できちんと教えている。という確信があれば、いたずらに心配したり禁止に終始したりする必要がないからです。

夏休みから交際を始めたカップルは、下校バスに乗る前に毎日熱いハグをしていました。その行為に教師たちはビックリしましたが、「いけません」